

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19960

研究課題名（和文）韓国における新たなポストコロニアリズムの展開：ナショナリズムとの関連性をめぐって

研究課題名（英文）New Directions in Korean Postcolonial Theory: Focusing on its Relationship with Nationalism

研究代表者

夫 鍾閔（Boo, Jong-min）

京都大学・法学研究科・特定助教

研究者番号：50966439

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では韓国の民族文学論に焦点を当て、韓国の近現代史の政治状況との関係において民族がどのような形で提示され、最終的にはポストコロニアリズムとどのような関係を結んだのかについて考察した。特に、民族文学論の歴史的背景を辿りながら、西洋のポストコロニアリズムが受容される韓国の文脈において具体的にどのような変容があったのかを検討し、非西洋社会という文脈においてポストコロニアリズムがナショナリズムとどのように関わるのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、韓国におけるポストコロニアリズムの新たな展開と、ナショナリズムとの複雑な関係を考察する。従来のポストコロニアリズム研究は、ポストモダニズムやポスト構造主義の視点から非西洋社会を分析する傾向があったが、本研究は韓国という非西洋社会におけるポストコロニアリズム理論の独自の発展に着目することで、ポストコロニアリズム研究に新たな視座を提供する。特に、韓国における民族文学論を軸に、ナショナリズムとポストコロニアリズムの相互作用を明らかにし、韓国現代知性史の展開を解明することで、韓国研究にも新たな貢献を果たす。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the Korean discourse on the concept of Minjok Munhak (national literature), this study examines how Minjok (Korean nation) was presented in relation to the political situation of Korea's modern and contemporary history, and ultimately how it related to postcolonialism. In particular, by tracing the historical background of the discourse on Minjok Munhak, this research explores the specific transformations that took place in the Korean context as Western theories of postcolonialism were received. It clarifies how postcolonialism relates to nationalism in the context of a non-Western society.

研究分野：思想史

キーワード：ポストコロニアリズム ナショナリズム 民族文学 韓国思想 脱植民地主義

1. 研究開始当初の背景

ポストコロニアリズムは、1970年代後半以降ポストモダニズムとポスト構造主義の文脈で提起された用語であり、西洋の歴史主義の全体化形態に対する批判を基礎づける一つの方法として一般的に認識されている。しかし、戦後直後の「ポストコロニアル国家」といった用法に見られるように、「ポストコロニアル」という言葉自体は、このような思潮が登場する前に、第二次世界大戦以降から旧植民地の独立以後を意味する用語としてすでに存在していた。この用語は、時には第三世界主義の潮流の中で「反植民地主義的 (anti-colonial)」と同一の意味で扱われ、その文脈で第三世界に現れた抵抗活動としてのナショナリズムと親和的な修辞でもあった。しかし、1970年代後半からエドワード・サイード、ホーミ・バーバ、ガヤトリ・スピヴァクといった思想家たちの出現により、「ポストコロニアル」の意味は今日の用法に転化される。とはいえ、前者の契機と後者の契機が決して無関係ではないという議論は、これまで何度も試みられてきた。

しかし、日本のポストコロニアリズムの主な議論でもわかるように、ポストコロニアリズムの観点から反植民地主義的ナショナリズムを擁護することはポストコロニアリズムの理論的側面によるものというより、あくまで状況的なものとなる。特にこの観点を強く堅持するならば、植民地的な特殊状況を考慮してナショナリズムを周縁者の抵抗として暫定的に評価できるとしても、両者の「ポストコロニアル」の問題意識が事実上異なることを認めなければならない。ところで、このような観点こそ、1990～2000年代韓国においてポストモダン的なポストコロニアリズムが受容されるにあたって、論争になった部分であった。

2. 研究の目的

今日の韓国のポストコロニアリズムの議論の主流は、ナショナリズムとの関係において二つのポストコロニアルが矛盾するのではなく、むしろ両者が理論的に交差する複雑な関係を示している。本研究は、韓国という非西洋社会の文脈におけるポストコロニアリズム理論の特徴に着目することで、ポストコロニアリズム研究に新たな視座を提供することその目標とする。具体的には、韓国におけるポストコロニアリズムの受容にも大きな影響を及ぼした民族文学論に焦点を当て、非西洋社会という文脈においてポストコロニアリズムがナショナリズムとどのように関わるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

研究の方法としては、民族文学論に焦点を当て、韓国の近現代史の政治状況との関係において民族がどのような形で提示され、最終的にはそれがポストコロニアリズムとどのような関係を結んだのかについて検討した。特に、1970年代に民族文学の意義を第三世界論との関係で提示した白承暻や金鍾哲の議論から、彼らの民族文学論の影響を受けながらポストコロニアリズムの再解釈を行なった河最一や楊鍾根らの2000年代までの議論を中心に研究を行った。そして、民族文学論の歴史的背景を辿りながら、西洋のポストコロニアリズムが受容される韓国の文脈において具体的にどのような変容があったのかを考察する。その後、これがたどり着いたポストコロニアルの理路を考察すると同時に、最終的に周縁の思想としてのポストコロニアリズムの問題意識に照らしながら韓国のポストコロニアリズムの意義と限界を明らかにする。

4. 研究成果

本研究は、韓国におけるポストコロニアリズムの潮流を、欧米発のポストモダン的なポストコロニアリズムとは異なる韓国独自の視点から明らかにすることを目的としている。現在、韓国におけるポストコロニアリズムの受容にも影響を及ぼした民族文学論の歴史的背景のみならず、韓国におけるポストコロニアリズムの受容過程を明らかにした。

まず、韓国における「民族」という言葉は、植民地の経験を経て、最初から帝国主義との対比で抵抗の正当性を示すための言葉であったものの、「解放」以降、抵抗的な性格は薄れていった。「解放」直後、民族という用語は左右の文学人と知識人を問わずすべての勢力に動員される概念でもあったが、例えば、当時不安定な統治基盤を有していた支配層の人々も、他でもない民族という名の下で自分たちの統治の安定を図ろうとしていた。このような背景として解放後からの朝鮮半島の分断という現実の影響もあったが、時間が経つにつれて分断という特殊な状況はますます政権と支配層によって専有されていった。李承晩政権は、冷戦下における民族の分断という状況の特殊性を強調しながら、「南韓」政府の正当性とともに関与的な統治の必要性を主張するようになる。このように国家体制を擁護するために集団としての民族を強調するレトリックは、単に李承晩政権に限らず、「民主化」以前の軍事政権まで続いた常套手段だった。

このような民族主義の論理に基づく軍事政権の長期執権化は、以後、抵抗勢力をして、むしろ

民族を新たに論じることで独裁政権に対抗させることになった。特に 1970 年代になって民族という用語を通じて軍事政権の不当性を説く言説は様々な分野で現れ始めたが、その中でも「解放」以降続いてきた民族文学論は独裁政権に対抗するために民族の再定義を試みる代表的な潮流として新たに浮上した。このような雰囲気と相まって、同時期、文学界全体において民族文学の再定義と民族そのものの意義をめぐる様々な論争が行われる。この論争において民族文学の意義が第三世界論との関係で提示される傾向が目立つが、この過程で抵抗という契機が大きく強調され始める。このような背景としては、文学も一つの社会的実践でなければならないという当時の文学界の雰囲気だけでなく、国際社会において第三世界の地位が浮上するにつれ、政治学界や社会科学界で活発に第三世界論が議論されていた当時の韓国の状況との関連もあった。

しかし、ここで第三世界の定義が問題となっていた。当時第三世界の特徴を勢力圏や地域として捉える議論もあったが、このような議論に抗し、白樂晴(ペク・ナクチョン)は「特定の地域を世界の他の地域から孤立させて『第三世界』を実体化することは、『第三世界主義』とも言える新たな虚偽意識を生む」と批判した。白は、第三世界の特徴を地域性ではなく、「民衆性」という一つの象徴的な意味として提示し、その観点から第三世界文学論としての民族文学を主張した。つまり、第三世界という言葉は、「世界を三つに区別するという言葉というより、むしろ一つにまとめて見ることにその意義があり」、「強者と金持ちの立場で見ないで民衆の立場で見よう」とすること、すなわち周縁的存在を認識するための用語として提示されたのである。白は第三世界民族の反帝国主義的抵抗のなかに、下から形成される「民衆意識」を見出し、第三世界という概念の中で〈民族=民衆〉という図式を形成していったが、その後 1980 年代の〈第三世界文学=民族文学〉は最終的に当時の独裁権力と対比される民衆的主体としての民族像を提示することになる。つまり、民族文学は「民主化」の到来まで、民族分断の特殊性を強調して自分たちの独裁を正当化する軍事政権に対抗する形で、もう一つの「民族」論を提示してきたのである。

このような民族文学論は以後、1990 年代まで韓国文学界の主流の言説となり、「民主化」以降は、これまで軍事政権によって封印されていた「民族」の統一問題についても積極的な議論を展開していくことになる。しかし 1990 年代の社会主義崩壊を背景に韓国にもポストモダニズムの思想が積極的に受け入れられ、その流行は民族文学の地位を揺さぶり始めた。そして、こうした文脈において、ハイブリディティを強調するホーミ・バーバの理論の本格的な受容は、従来の第三世界文学論とポストコロニアリズムがまるで矛盾するもののように認識を変えていった。なぜなら、当時受容されていたバーバの理論は、第三世界の思想を代表するフランツ・ファノンの思想をポストコロニアリズムの新しい言説として再解釈しながら呼び出したからである。そのファノン像は、宗主国人と植民地人の矛盾を告発する代表的な言説として取り上げられたにもかかわらず、韓国では異質なものとして受け止められた。韓国でファノンの思想は 1970 年代からすでに積極的に受け入れられていたが、その当時のファノンは主に革命運動家として紹介されていた。このような傾向は軍事独裁政権が成立していたという当時の状況と無関係ではなく、ファノンの思想はしばしば、権力に対する暴力抵抗を正当化する思想として解釈されていた。そのような観点からすれば、バーバをはじめとするポストコロニアル理論が呼び出したファノンは、「手なずけられたファノン、洗練されて穏やかになったファノン」にすぎなかった。このような文脈で、2000 年代にかけて既存のポストコロニアル理論におけるファノンの思想が再解釈されることとともに、第三世界ナショナリズムとポストコロニアリズムの関係が問われるようになる。

2000 年代から民族文学の内部においてもポストモダニズムの影響を受け、民族主義的な言説の問題点を乗り越えて新たな民族文学論を展開しようとする動きが生じた。その代表的な文学評論家が河景一(ハ・ジョンイル)であり、彼は、既存のポストコロニアリズムのハイブリディティの概念による「親日文学」論を批判しながらも、「民族」の観点から「脱植民地」の理路を新たに構想しようとした。以後、ナショナリズムとポストコロニアリズムを両立させようとする試みは、河だけでなく、多くの論者によって行われてきた。

ところで、2000 年代のポストモダニズムの流行によってナショナリズムそのものが有する排他性と危険性が指摘されることで、ナショナリズムとポストコロニアリズムの両立の試みは、その後、健全なナショナリズムとは何かという解明へとつながっていった。これは最終的に、ナショナリズムと多文化主義の共存、すなわち多文化主義はナショナリズムと対立するものではないという今日韓国の多文化主義理解にも影響を及ぼしたと言える。このような試みは、現実的な妥協の結果なのか、それとも新たな理論的含意を持つものなのかは、今後のさらなる研究が必要である。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 夫 鍾関
2．発表標題 韓国における新たなポストコロニアリズムの展開：ナショナリズムとの関連性をめぐって
3．学会等名 社会思想史学会 第48回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 夫 鍾関
2．発表標題 第三世界文学としての「民族文学」論とポストコロニアリズム：二つのポストコロニアルの競合と錯綜をめぐって
3．学会等名 第74回朝鮮学会大会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------